

第2章

食をめぐる現状

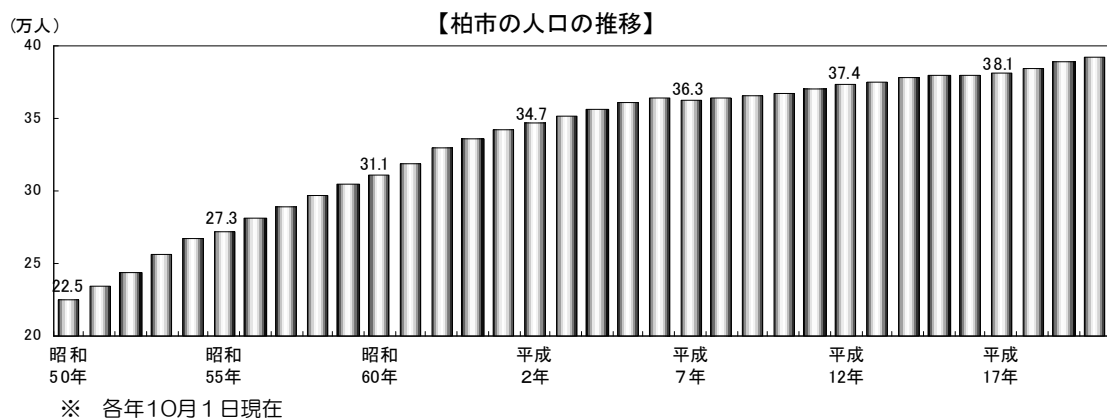
第2章 食をめぐる現状

1 柏市の特徴

(1) 柏市の人口動向

総人口の緩やかな伸びの中で進展する高齢化と、全国平均を超える若年層構成率が特徴

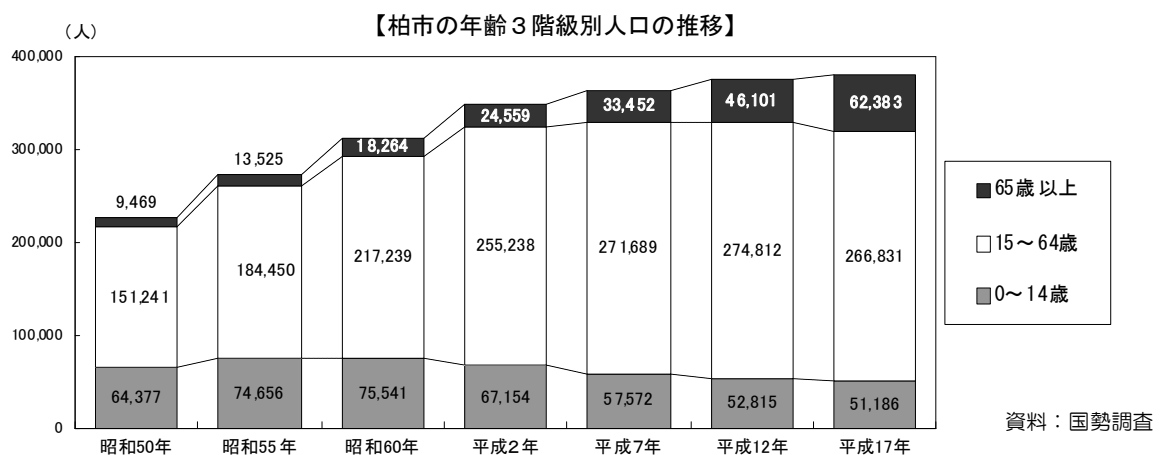
- 柏市の人口は、平成20年10月1日現在391,943人で、千葉県の総人口(6,147,347人)に占める割合は6.4%となっています。



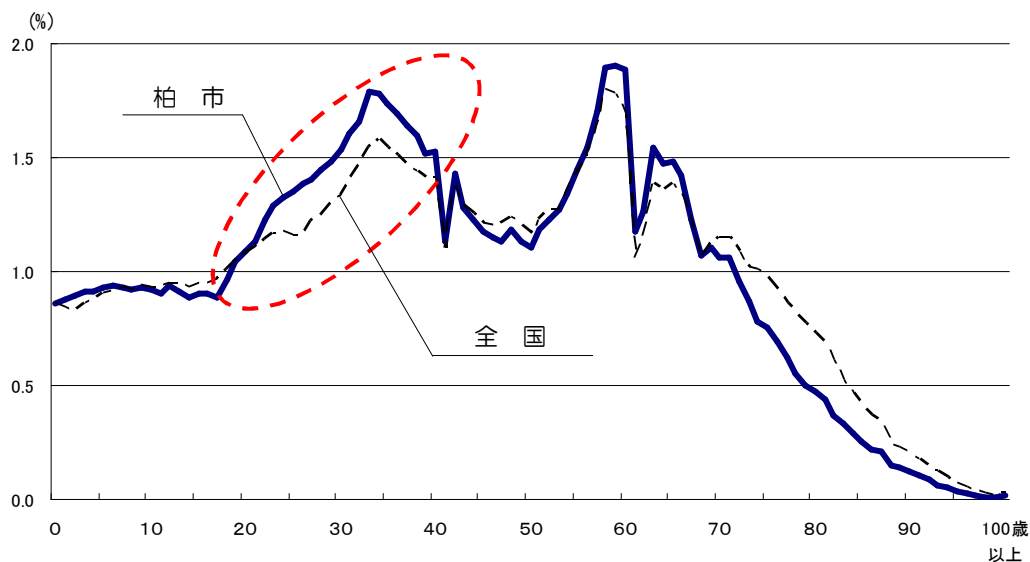
資料：国勢調査結果報告書、千葉県毎月常住人口調査結果報告

- 年齢3階級別人口の推移では、高齢化が進んでいる一方、生産年齢人口の構成比は減少傾向にあります。

しかし、国の年齢構造と比較すると、柏市では20代、30代の占める割合が国平均を上回っており、大都市に近郊した立地性からベッドタウンとして発展を続ける中で、「若者のまち」の様相が強まっています。



【柏市の年齢別人口構成比】（平成19年10月1日現在）



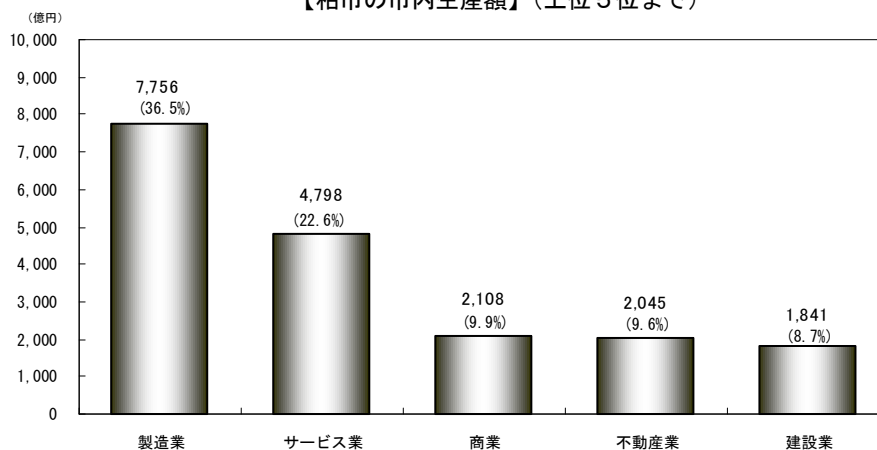
資料：柏市統計書，総務省統計局調べ

（２）柏市経済の生産構造

食にかかわる業種を中心に製造業・サービス業・商業が生産額の7割までを占める「生活産業都市」

- 柏市の産業構造を生産額でみると，製造業及びサービス業が全体の59.1%を占めています。また，業種別には，製造業では「食品加工」がその第2位を占めるほか，サービス業では「飲食店」が第1位を，また，商業では「食品関連小売」がその第2位，第3位を占めるなど，食に関する業種集積が進んだ“生活産業都市”としての構造特性を有します。

【柏市の市内生産額】（上位5位まで）



※ カッコ内は構成比（％）

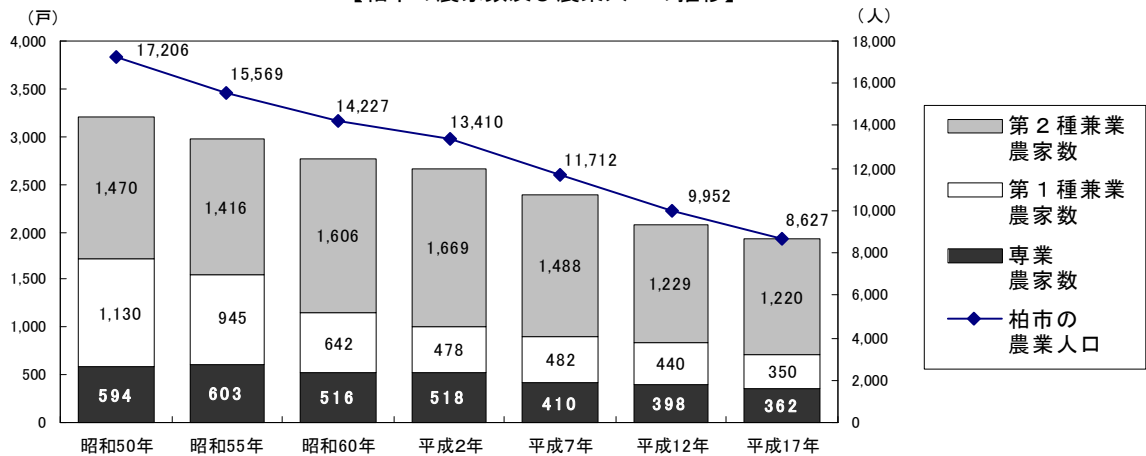
資料：柏市産業連関表

(3) 柏市の農業人口と経営耕地面積の状況

農業にかかわるヒト・モノがともに減少傾向

- 市内の農業人口は、昭和50年から平成17年の30年で半減しています。専業・兼業の農家数も減少しています。特に第1種兼業農家の減少が目立ち30年間で昭和50年当時の30%程度にまで落ち込んでいます。

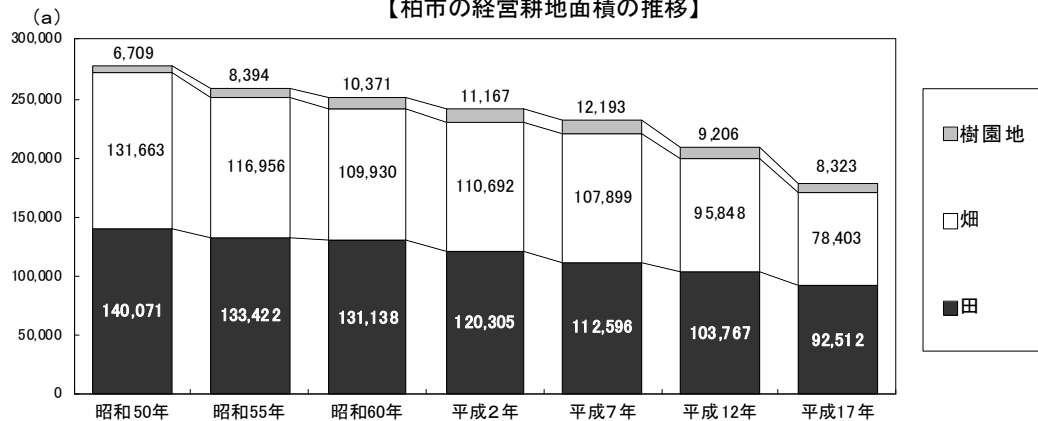
【柏市の農家数及び農業人口の推移】



※ 各年2月1日現在

資料：農林水産省「農業基本調査結果報告書」,「農林業センサス結果報告書」,「農業センサス結果報告書」

【柏市の経営耕地面積の推移】



※ 各年2月1日現在

資料：農林水産省「農業基本調査結果報告書」,「農林業センサス結果報告書」,「農業センサス結果報告書」

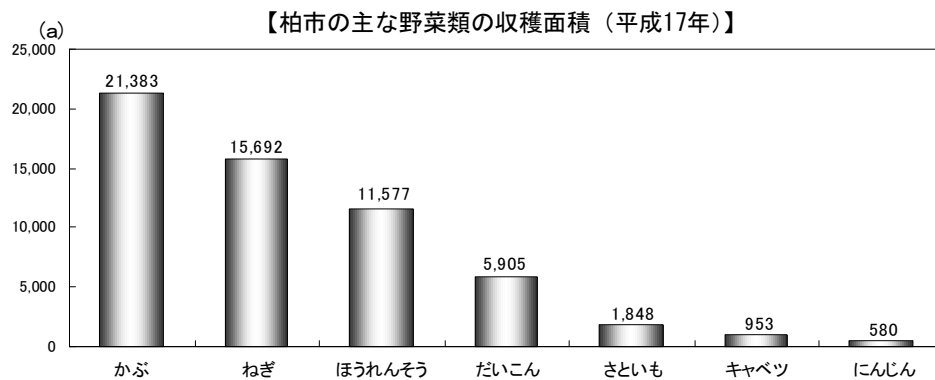
- ※専業農家：世帯員の中に兼業従事者（調査期日前1年間に30日以上雇用兼業に従事した者又は調査期日前1年間に販売金額が15万円以上ある自営兼業に従事した者）が1人もいない農家を指す。
- ※第1種兼業農家：世帯員の中に兼業従事者が1人以上いる農家を「兼業農家」といい、このうち、農業所得を主とする兼業農家を指す。
- ※第2種兼業農家：上記兼業農家のうち、農業所得を従とする兼業農家を指す。

(4) 柏市農業の規模と農産物の特徴

かぶ・ねぎ・ほうれんそうの収穫量は全国トップレベル

- 市内で収穫されている農作物のうち、かぶの収穫量は全国1位で、2位の東庄町の2倍以上になっています。

また、大消費地である東京圏へのアクセスが容易なことから、傷みやすい軟弱野菜(ねぎ・ほうれんそう)の生産も盛んです。



資料：農林水産省「平成18年市町村別生産農業所得統計」

【作物別の農業産出額（市町村別上位10位）（平成18年）】

単位：t

順位	かぶ		ねぎ		ほうれんそう	
	市町村	収穫量	市町村	収穫量	市町村	収穫量
1	千葉県 柏市	15,000	埼玉県 深谷市	27,800	岐阜県 高山市	8,660
2	千葉県 東庄町	6,510	茨城県 坂東市	16,000	埼玉県 深谷市	6,190
3	千葉県 松戸市	4,680	埼玉県 熊谷市	10,800	群馬県 太田市	5,870
4	埼玉県 川越市	4,180	千葉県 松戸市	7,820	徳島県 徳島市	5,490
5	青森県 野辺地町	3,420	千葉県 柏市	7,730	千葉県 野田市	5,430
6	新潟県 新潟市	2,900	大分県 豊後高田市	7,390	千葉県 柏市	4,830
7	千葉県 船橋市	2,700	千葉県 山武市	7,330	福岡県 久留米市	4,660
8	京都府 京都市	2,190	群馬県 太田市	6,720	群馬県 伊勢崎市	4,650
9	山形県 鶴岡市	2,140	鳥取県 米子市	6,570	千葉県 船橋市	4,640
10	青森県 東北町	2,110	埼玉県 本庄市	5,750	宮崎県 小林市	4,250

資料：「野菜生産出荷統計（平成18年）」

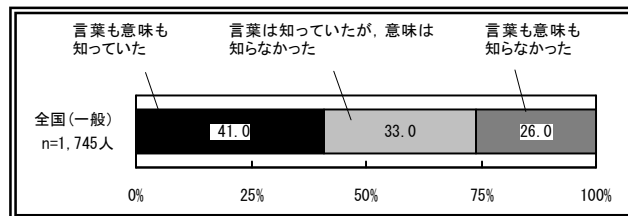
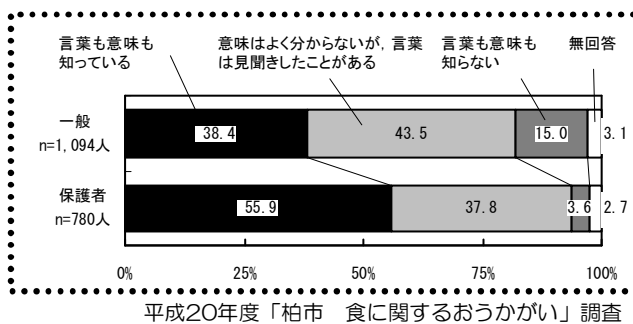
2 「食」に関する市民の意識



内は平成20年「柏市 食に関するおうかがい」調査結果
一般＝一般市民 保護者＝幼児・小学生の保護者

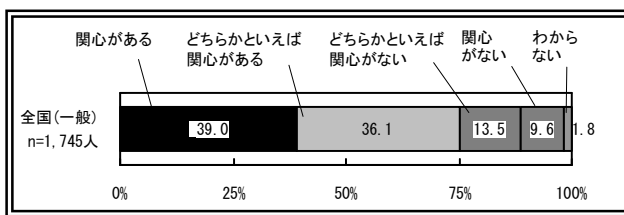
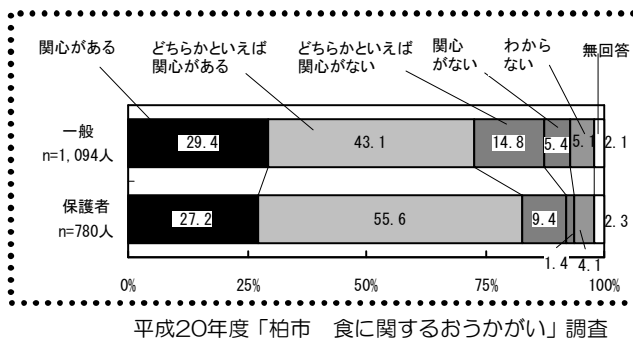
(1) 食育の周知度と関心度

食育の関心度については保護者、一般市民ともに意識の喚起が必要な状況



■ 市民の中に「食育」がどの程度浸透しているかをみると、幼児や小学生をもつ保護者の認知度は高く、内容までを知っている方が半数を超えます。

■ その一方で、一般市民では意味までを知っている方が4割未満にとどまり、全国調査の結果と比べても下回っている結果であり、一層「食育」の浸透を図っていくことが求められます。



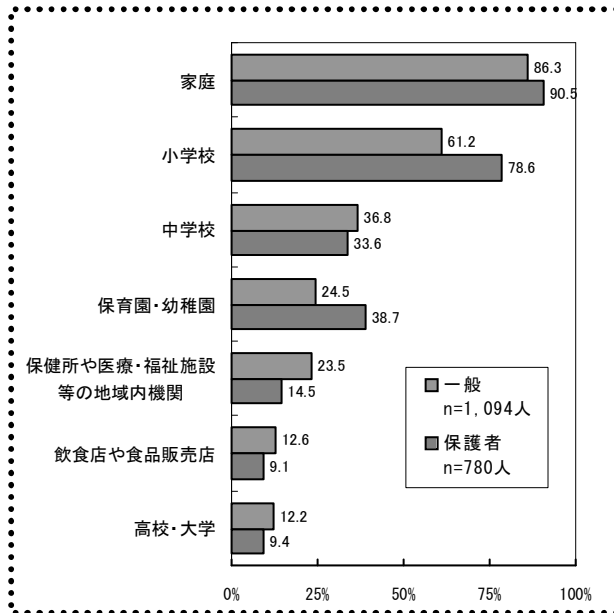
■ 『食育』への関心度をみると、食育の周知度が高い保護者においても「積極的関心派」(関心があると回答した人)は3割近くにとどまり、全国調査結果よりも10ポイントほど低く、“どちらかといえば関心がある”人が過半数を占める状況です。

■ さらに、一般市民では無関心層(どちらかといえば関心がない+関心がない)と判断保留層(わからない)が合わせて市民の4人に1人という状況になっています。

(2) 食育推進の効果的フィールド

**食育のメインステージはやはり「家庭」が中心。
食育が特に必要な層は「子ども層」とともに、「保護者」や「青年層」**

【食育がおこなわれるべき場所（上位7位）】



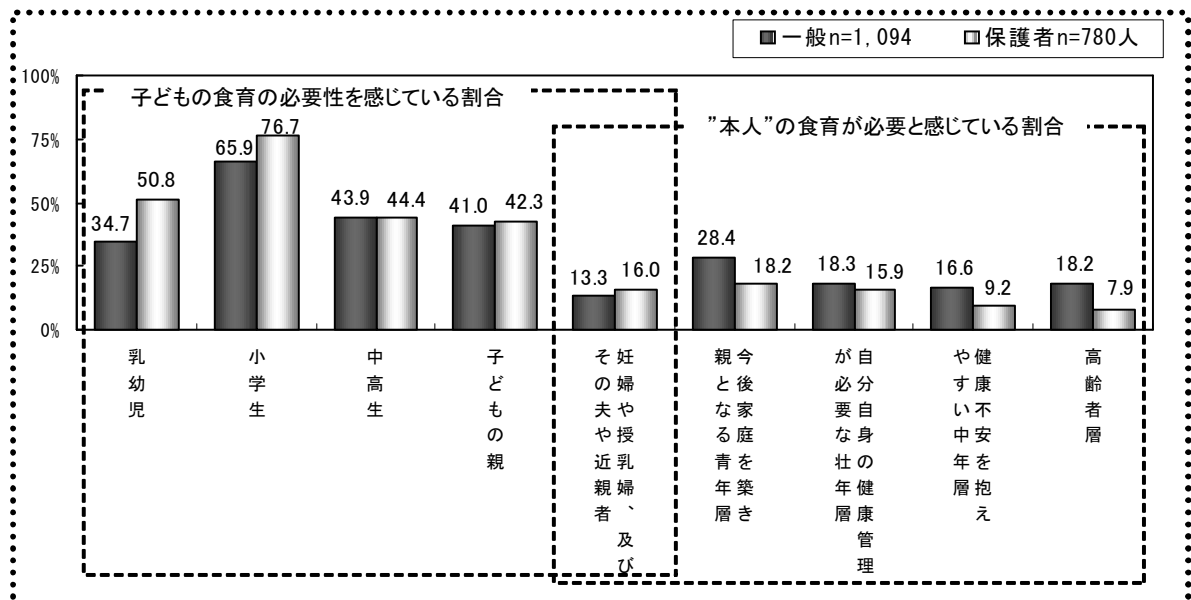
平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

■ 食育がおこなわれるべき場所は、一般市民・保護者とも「家庭」が約9割、続いて「小学校」「中学校」となっており、教育の分野での食育推進への期待が現れています。

■ また、食育が特に必要だと思う（年齢）層については、総じて乳幼児や就学児童・生徒、あるいは妊婦や子育て中の親といった親子層での食育の必要性を挙げる人が多くを占め、いずれも子どもたちの食育の必要性が共通認識となっています。

■ なお、“本人の食育”が必要であると認識されている層としては、“今後家庭を築き親となる「青年層」”を対象とした食育の必要性も挙げられています。

【食育が特に必要だと思う層】

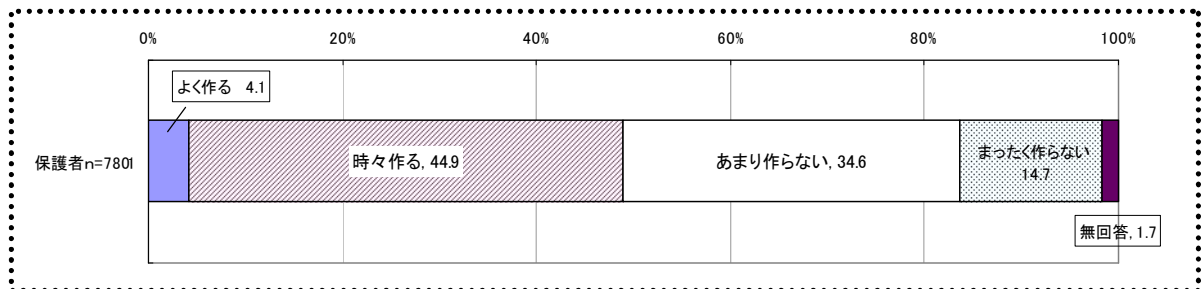


平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

子どもが料理を体験する機会が不足しているのが実情

- 食育の効果的なフィールドと多くが認識している「家庭」においても、親子で料理づくりの機会をみると、「よく作る」はわずか4.1%である一方、「あまり作らない」と「まったく作らない」の合計が半数ほどを占めており、子どもが料理を体験する機会が少ない状況が示される結果となっています。

【家庭において親子で料理をつくる機会】

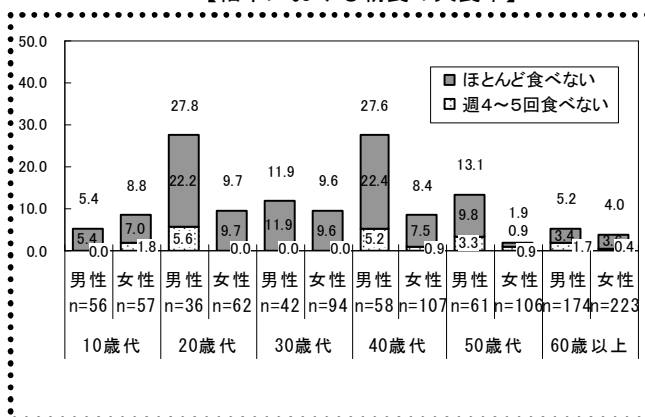


(3) 朝食の摂食状況（欠食率）

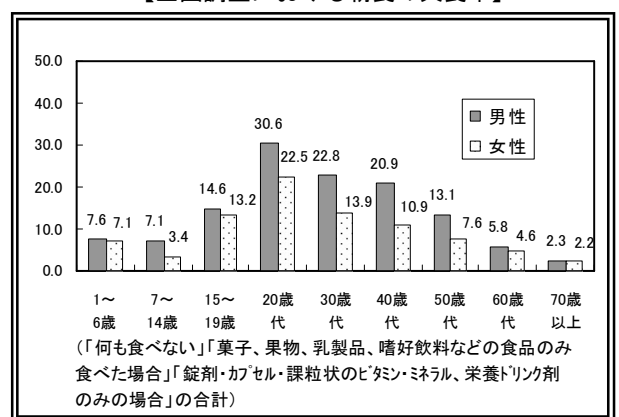
市民の朝食欠食率は、特に20歳代、40歳代の男性が顕著

- 柏市での朝食の欠食率は、20歳代、40歳代で際立って高く、それぞれの男性の欠食率が3割近くに上ります。また、10歳代以外は、各年代を通じて男性の欠食率が女性を上回っている結果であり、20歳代、40歳代では約4人に1人の割合となっています。
- 欠食率の捉え方の差異があって単純に比較できませんが、全国調査の結果と比べると、40歳代の男性が、約6.7ポイント全国平均を上回っていますが、他の年代では下回っており、特に女性の欠食率は、大きく下回っています。

【柏市における朝食の欠食率】



【全国調査における朝食の欠食率】

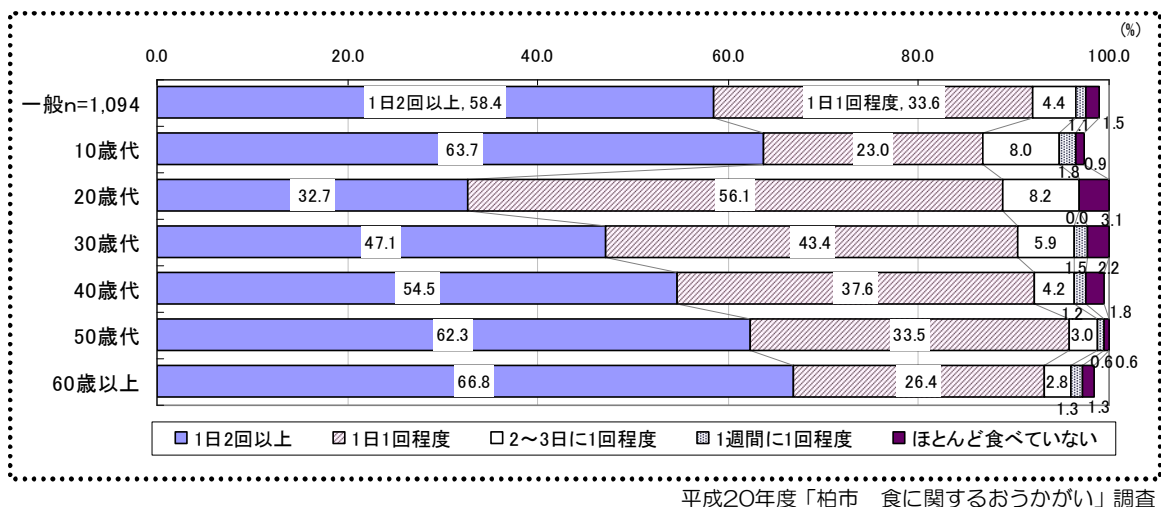


(4) 栄養バランスのとれた食事と緑黄色野菜の摂取状況

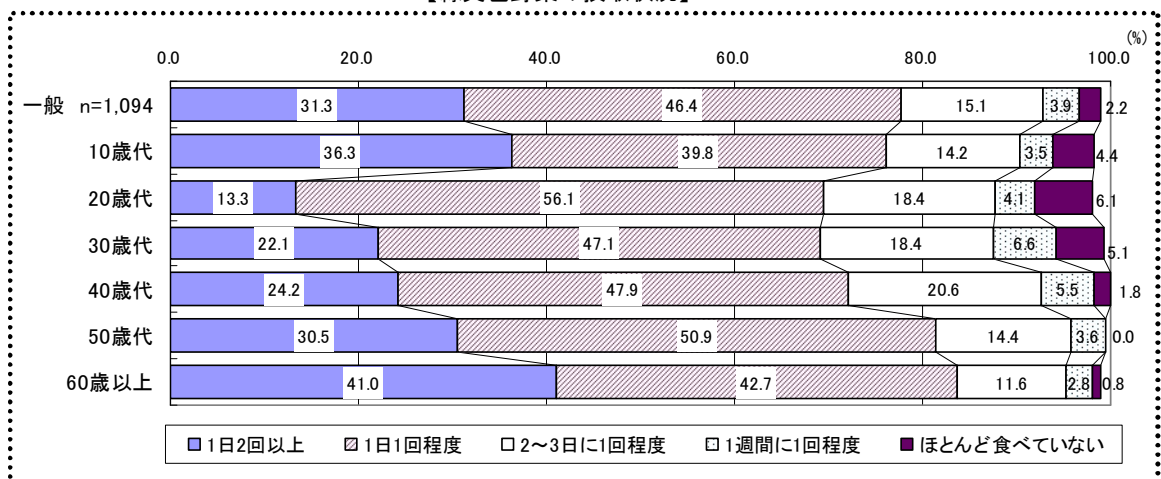
主食・副菜・主菜の栄養バランスのとれた食事や緑黄色野菜の摂取は、青年層ほど少ない

- 主食・副菜・主菜の栄養バランスのとれた食事の摂取状況では、「1日2回以上」が全体の半数を超えるなかで、20歳代では32.7%，30歳代では47.1%などと若年層ほど摂取頻度が低くなっています。
- 野菜を摂取することは現代人に不足がちなビタミンやミネラルを摂取する重要な意味あいがありますが、緑黄色野菜の摂取状況をみると、「1日2回以上」は市民全体でも3割ほどにとどまります。特に20歳代ではわずか1割強と、上記同様に若年層ほど摂取している割合が極端に少ない結果となっています。

【主食・副菜・主菜のバランスのとれた食事の摂取状況】



【緑黄色野菜の摂取状況】



※上記グラフは「わからない」と「無回答」を省略している。

平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

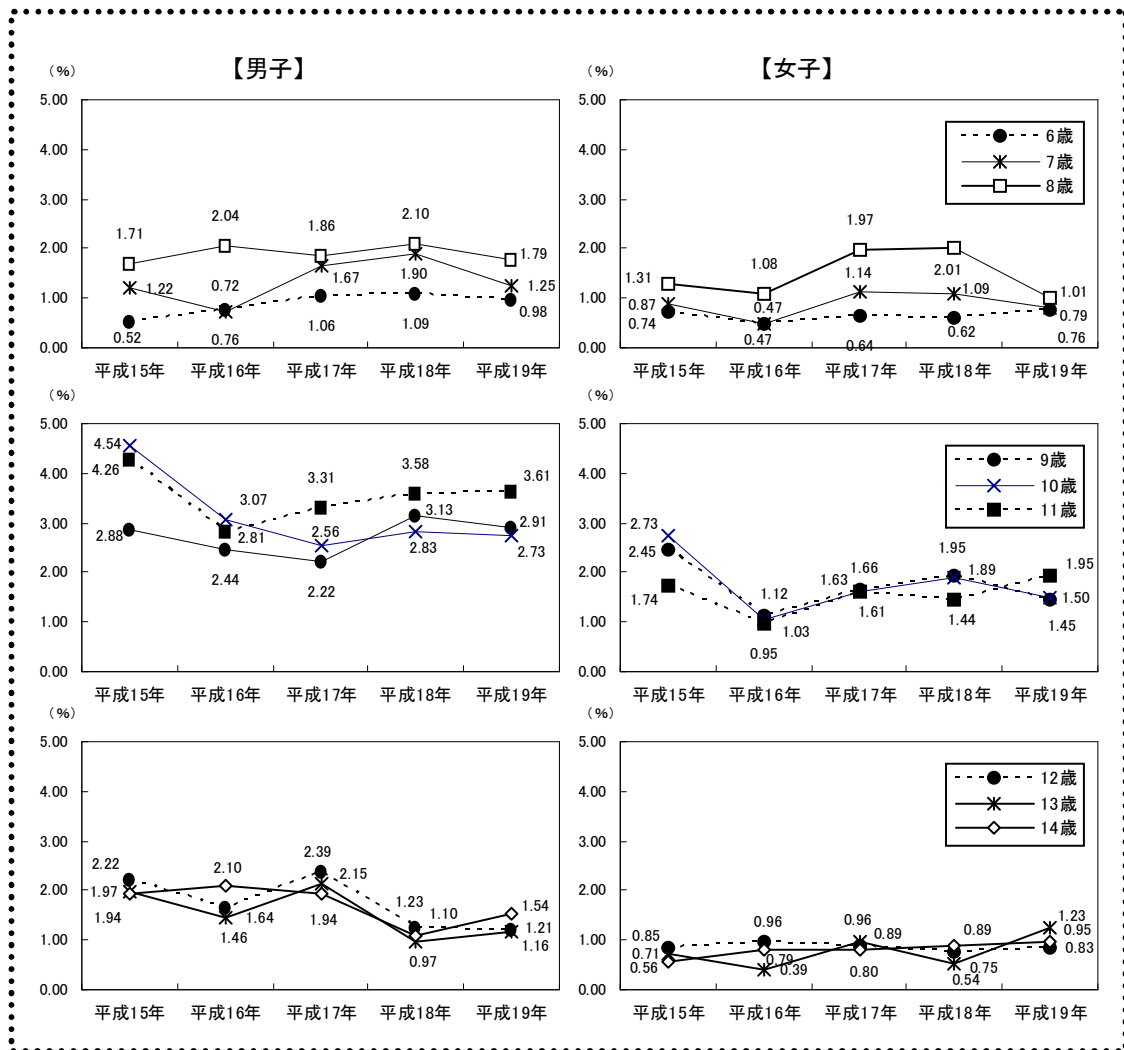
3 健康

(1) 子どもの肥満

小学校高学年での肥満傾向

- 健康日本21中間評価結果等にみられるように、全国的に小学校高学年の成長期に向け肥満傾向が上昇している一方で、中学生以降では過度の痩身志向が問題視されています。
- 本市の平成19年度の結果でも小学校高学年ほど肥満の割合が高い傾向が見て取れます。一方、年齢が上がるほど肥満の割合が低く、男女とも9歳～11歳より12歳～14歳のほうが肥満の割合が低く、一面では痩身志向の強まりが懸念されるところです。

【児童・生徒の肥満傾向】



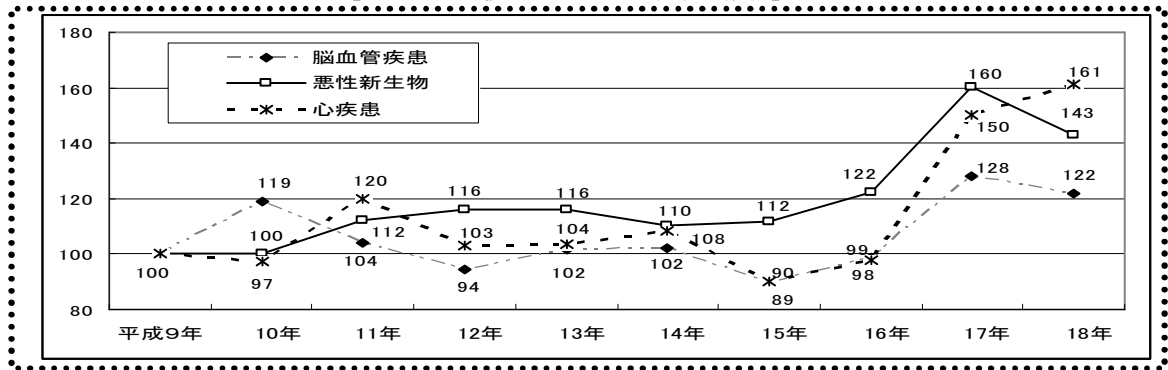
資料：「柏市学校保健年報」

(2) 生活習慣病

市民の死因のトップ3は3大生活習慣病

- 柏市における死亡者数は平成9年の1,613人から平成18年には2,413人へと増加傾向が続いています。主要死因別では、平成18年の死亡者数2,413人のうち、「悪性新生物（がん）」が31.3%、「心疾患」が16.8%、「脳血管疾患」が11.5%と、いわゆる3大生活習慣病が全体の6割ほどを占めており、その割合は平成15年以降、急速に高まっています。

【3大生活習慣病による死亡者数の推移】



※数値は、平成9年の各疾病ごとの死亡者数を100とした指数

資料：柏健康福祉センター「事業年鑑」

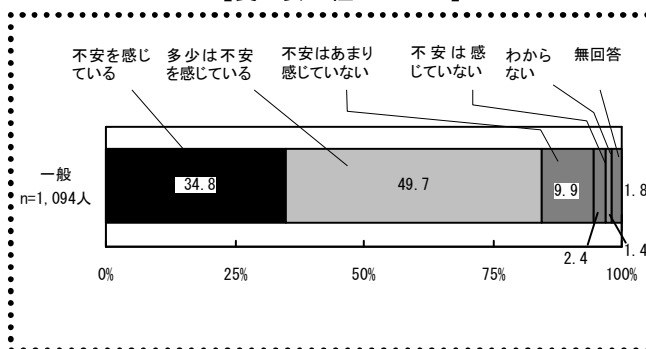
4 食の安全・安心

(1) 食品の安全性

食の安全への関心は高い。原産地(国)・添加物については不安大

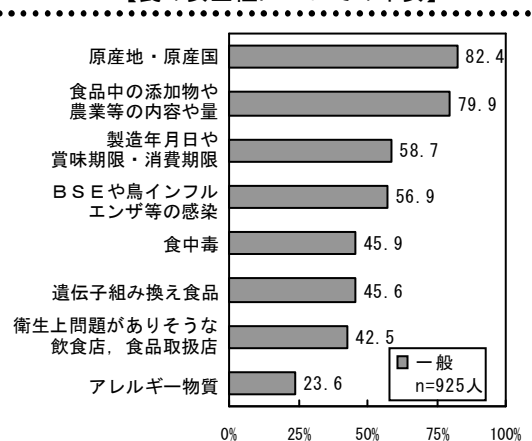
- 食の安全性について不安を感じているのは、84.5%となっています。その内容は、「原産地・原産国」が82.4%で最も多く、次いで「食品中の添加物や農薬等の内容や量」が79.9%、「製造年月日や賞味期限・消費期限」が58.7%となっています。

【食の安全性について】



平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

【食の安全性についての不安】

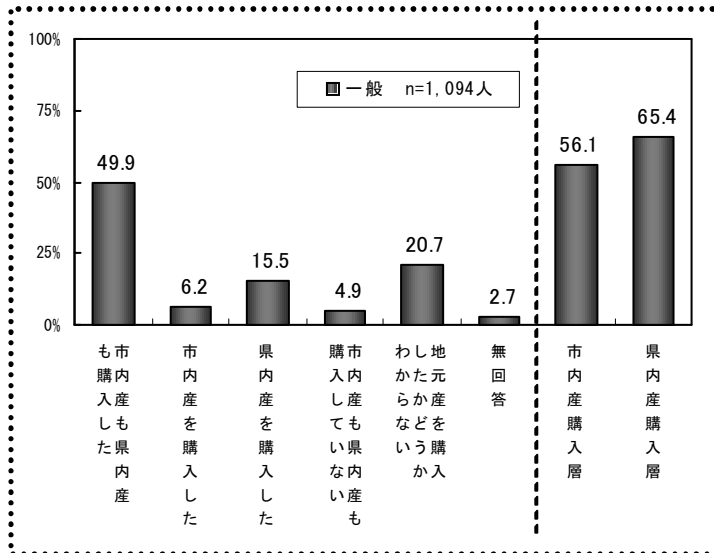


(2) 地元農産物について

地元産食材は好印象だが、身近な接点機会に課題

- 市民の過半数が、市内産及び県内産の食材を購入しており、そのメリットは、新鮮さを85.6%と高く評価しています。また、約8割が地元農産物コーナーの設置を希望しています。

【1か月以内の地元産食材の購入状況】

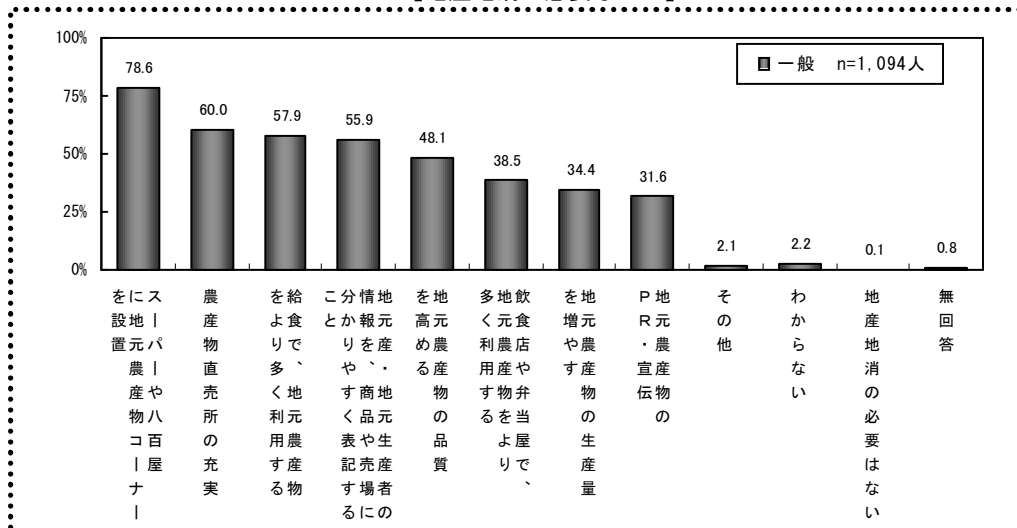


【地元産食材のメリット】

評価のポイント（上位5位まで）	%
《第1位》新鮮さ	85.6
《第2位》安全・安心	48.1
《第3位》おいしい	34.2
《第4位》価格が安い・量が多い	27.7
《第5位》環境にやさしい	15.4
その他（栄養価等）	13.1

平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

【地産地消に必要なこと】

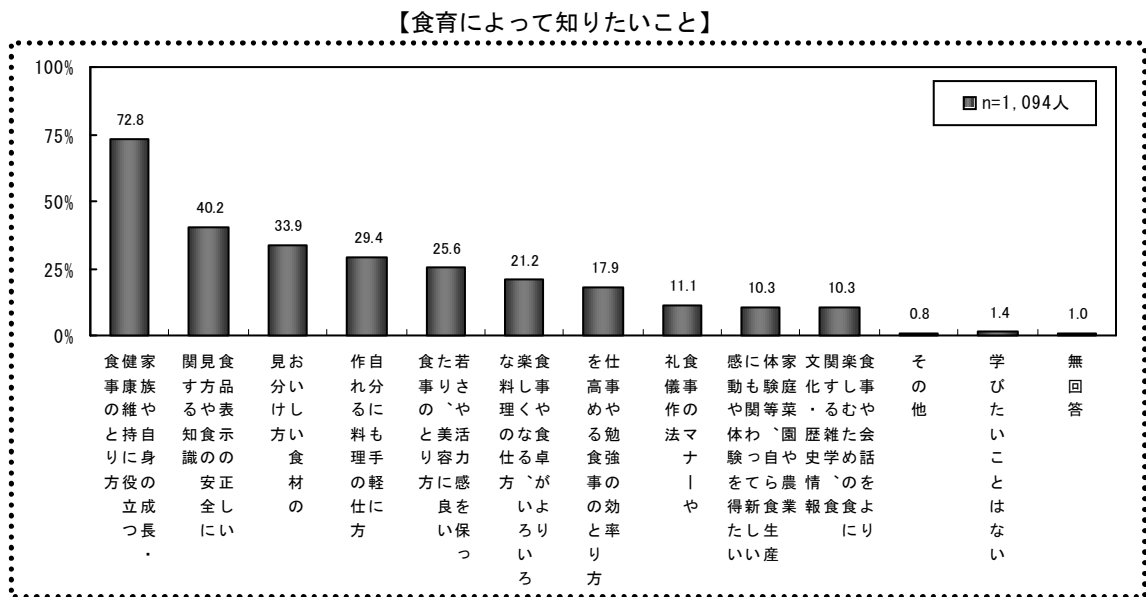


平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

5 食に対する要望・ニーズ

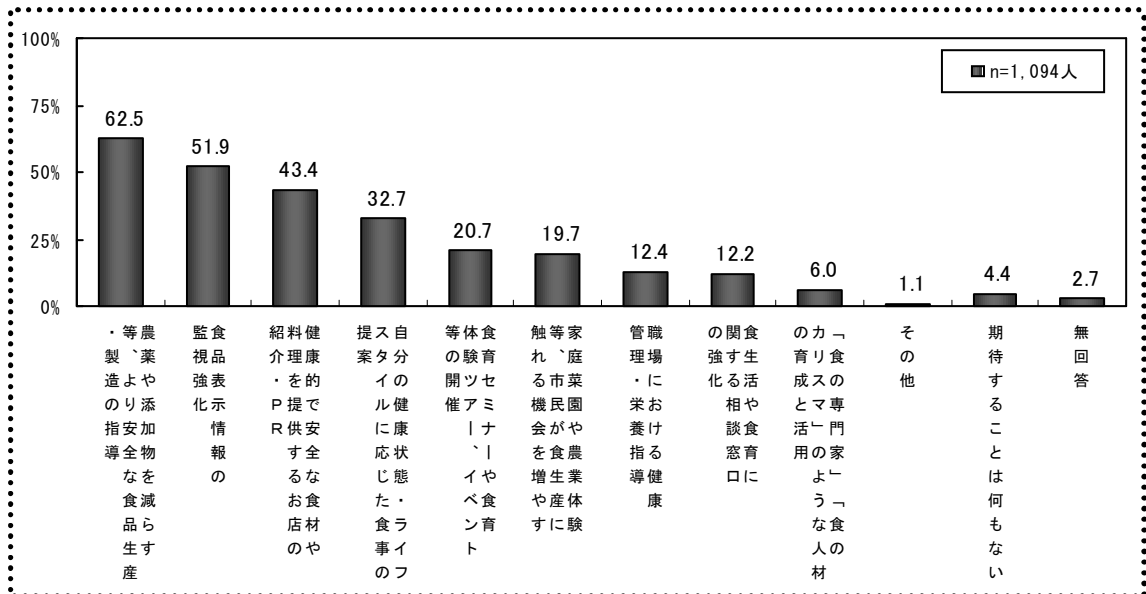
市民が求める食卓のキーワードは“安全、健康、団らん、地元産志向”

- 食育によって知りたいことは、「家族や自身の成長・健康維持に役立つ食事のとり方」が72.8%で最も多くなっています。また行政や地域社会に期待することは、「農薬や添加物を減らす等、より安全な食品生産・製造の指導」が62.5%で最も多くなっています。
- 先述の「市民の地元産食材の購入状況」の結果と併せてみたとき、市民の食に係るニーズは、“安全・健康・団らん・地元産志向”というキーワードに集約されます。



平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

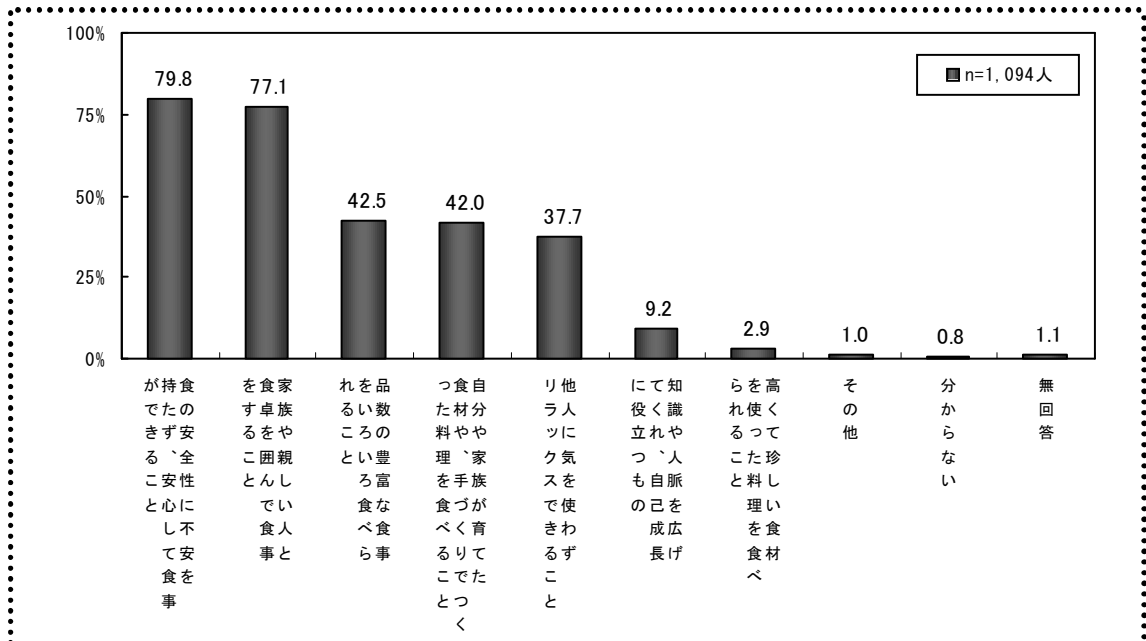
【行政や地域社会に期待すること】



平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

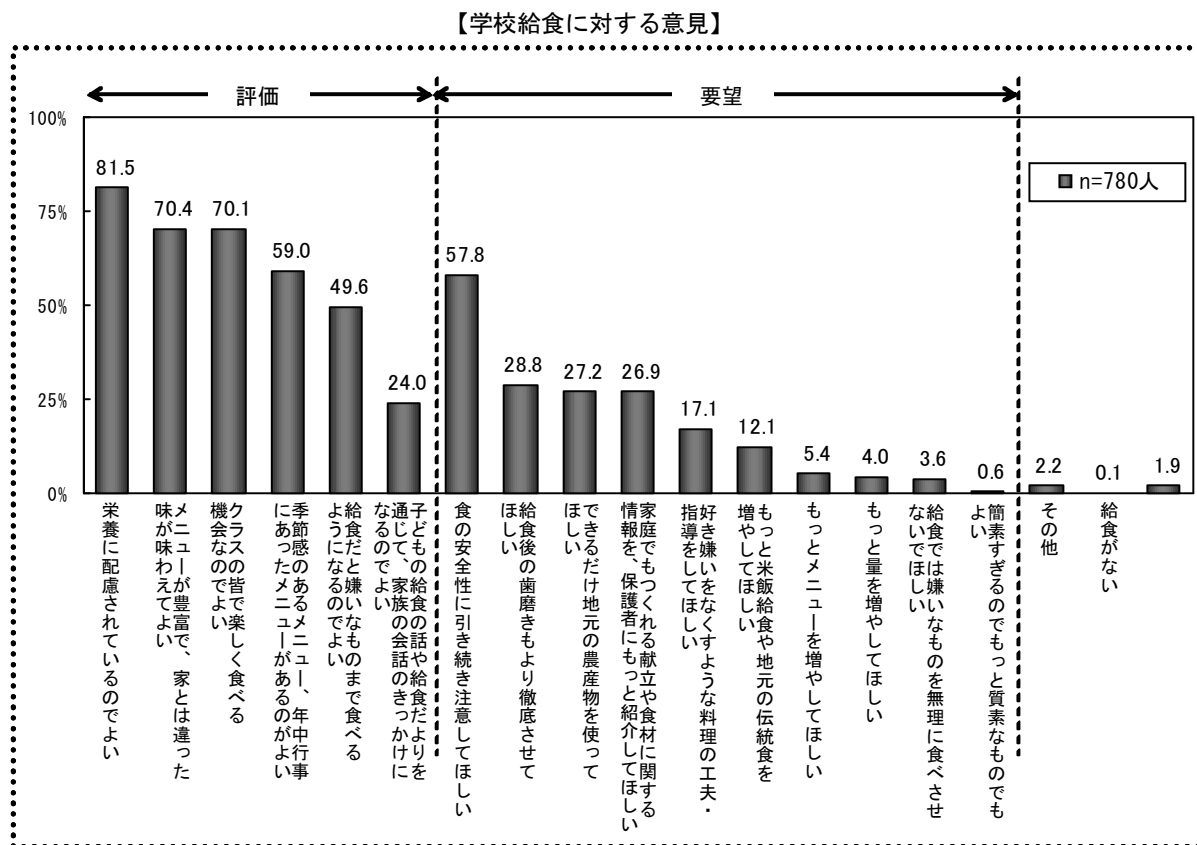
- 自分にとって理想の食事とは、「食の安全性に不安を持たず、安心して食事ができること」が79.8%、「家族や親しい人と食卓を囲んで食事をする」とが77.1%と多くなっています。

【自分にとって「理想的な食事」】



平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査

- 学校給食に対する保護者の評価としては、「栄養に配慮されている」「メニューが豊富で家とは違った味が味わえる」といった点が高評価を得ている一方で、「食の安全性に引き続き注意してほしい」（57.8%）、「できるだけ地元の農産物を使ってほしい」（27.2%）と食の安全性への配慮を求める意見が多いほか、少数ながらも「もっと米飯給食や地元の伝統食を増やしてほしい」（12.1%）という意見も寄せられています。



平成20年度「柏市 食に関するおうかがい」調査